若柳地織

農作業で使われていた野良着が時代にあわせて大変身。

若柳地織は1900年代から旧若柳町を中心として製造された綿織物。13軒あった同業者は次々と廃業し、とうとう千葉孝機業場の1軒となった。

千葉孝機業場の作業場には、初代が大正時代に購入した豊田式鉄製小幅動織機Y式（トヨタ自動車の創業者が開発した機械）が今もなお活躍している。三代目の千葉孝順さんにお話をお聞きした。

「もともとこの製品は、農作業で使われる野良着として広く利用されてきたものなんです。飛ぶように売れた時代がありましたが、化学繊維の登場で一気に売り上げが落ちました」。

卸が主流だった時代、千葉さんは直接販売することに活路を見出した。現在は時代にあわせ、"実用的民芸品"と名づけてメガネケースや名刺入れ、巾着、ネクタイなどをつくるようになった。そのきっかけをつくったのは、仙台の百貨店にきた3人組のお客様だった。

「商品を見て女性のお客様に『野良着でオシャレって（笑）』と笑われまして。頭にきましたね。でも帰りの電車の中で、どうやったら売れるのかを考えて、整理することができたんです」。

現在は各地の百貨店や海外にまで若柳地織の魅力を伝え、お客様がほしいものをお聞きするようにしている。メイドイン栗原は現在進行形で生まれているようだ。

通気性が良い上に乾きやすく、冬場は保温に優れ暖かいため、広く野良着として重宝されていた。

明治時代以降の仙台藩による支配がなくなった後、農作物や農具を収納する物置や作業小屋としての実用的な機能と、裕福な農家である象徴として栗原にも多くつくられました。そのため栗原市内の長屋門は市内を流れる一迫川、二迫川、三迫川沿いの農業に適した場所に500軒以上残っています。

建造当初の長屋門は、茅葺き屋根・土壁の門がほとんどでした。しかし、戦後になると多くの家では、屋根は瓦や金属板に葺き替え、壁は漆喰で塗り直したと言われています。門の中では脱穀や精米、養蚕が行われていましたが、農業機械が導入されたことで、門内での農作業は減りました。

現在は、主に物置や作業小屋として使われていますが、壊すと文化までなくなってしまうという考え方が生まれているようで、中には改築を施し、カフェやギャラリー、事務所として利用されている長屋門もあります。

長屋門カフェ